

韓国におけるコロニアルタウンの景観

—同化と異化, 保存・利用・破壊—

須山 聡

SUYAMA Satoshi

(COE共同研究員)

I はじめに

1 研究目的

本稿は韓国に現存する、日本植民地時代に日本人が建造した建築物（以下、日本建築と呼称する）に着目し、それらの利用の実態と、評価を明らかにすることを目的とする。目的を達成するため、植民地時代の日本建築の写真資料を収集し、それらの利用実態を主に^{チョルラ プク クンサン}全羅北道群山市と^{チョルラ ナム モッポ}全羅南道木浦市で現地調査した。

朝鮮半島における植民地時代の建築物は、一般に屈辱的な支配の象徴と見なされ、破壊されたと予測されている。しかし韓国においては植民地時代の建築物をめぐる、保存か破壊かの議論が続いている。このような議論がなされる一方、日本建築の実態についての調査は、韓国国内においても着手されはじめたばかりである。日本建築をめぐるさまざまな議論の背景には、日本建築をいかに評価すべきか、という論点が横たわる。すなわち、民族の自由を奪った35年間の歴史を消去すべきか、事実として記憶すべきか、である。しかし、植民地支配の象徴である日本建築は、一方において都市の一部をなす景観構成要素であるだけでなく、今なお都市の物理的な機能を担うインフラストラクチャーとして機能している。したがって、植民地時代に造られた日本建築は単なる歴史的存在ではなく、現在において評価され利用される対象である。日本建築に対する評価と利用を明らかにすることは、韓国における日本に対する視線を解き明かすことにもつながる。

われわれが本プロジェクトの主要な分析対象としている、澁澤敬三とその同人による写真（以下、澁澤写真と呼称する）には、朝鮮半島の景観が大量に含まれる（浜田 2004；浜田・八久保 2004）。しかし、澁澤写真の視点は農村におもに向けられ、都市の写真資料はわずかである。澁澤らは朝鮮半島のいわば「原形」を求めて写真を撮ったのであり、人為により改変された都市の姿は彼らの関心の外にあったものと思われる。

朝鮮半島における都市化は、日本の植民地支配期に急速に進行し、1910～1945年の間に都市人口は51万人から340万人に増加した（チェ 2000：103）。都市化は、植民地期朝鮮において顕著な現象といえよう。韓国における都市化は、朝鮮の開国にともなう外国勢力の進出と密接に関連する。すなわち、近代的な計画に基づいて設計された都市は、仁川・釜山をはじめとする開港都市が最初である。いうまでもなく、都市の成長は20世紀に顕著な現象であり、都市の存在を無視して近代化期の景観や環境を論ずることはできない。その意味で、本稿は澁澤写真があえて視線をそらした朝鮮の都市景観に焦

点をあてるものであり、韓国の景観・環境変化を非文字資料によって明らかにするという本プロジェクトの目的を達成するために不可欠なプロセスである。

なお、本稿では日本建築が現存する地区をコロニアルタウン (colonial town) と表現する。植民地支配によって形成された都市は、一般に植民地都市 (colonial city) と呼ばれる。植民地都市という語は、植民地主義の支配原理によって形成された都市、という意味を含み、シンガポールや香港をその典型とする。しかし、元来日本の植民地支配によって形成された韓国の都市であっても、現在は都市域が拡大し、日本建築が景観的に卓越する空間は、都市の一部を占めるにすぎない。すなわち、現状では植民地的景観を包含する街区と見なすのが、本稿の立場である。また本稿では日本に在来の建築様式に則った建物を日本式建築物、近代化によって海外、主に西洋から導入された建築様式に基づいた建物を西洋式建築物と呼称し、両者ともに日本建築とする。

2 分析視角

本稿では韓国におけるコロニアルタウンの日本建築を分析するために、同化 (assimilation)・異化 (dissimilation) の観点を導入する。同化と異化は元来言語学・記号論の概念であるが、本稿では建築学で用いられる文脈に則って適用する。

建築学では工場やダムといった大規模な構造物を再評価するためにテクノスケープ (technoscape) という概念が提案されている。テクノスケープは近代化・工業化のなかで人為的に構築され、1960~70年代における反公害論によって排除されてきた景観である。しかし、1980年代以降、産業・近代化遺跡の保存・活用の論調を受けて見直しがなされ、現在では地域振興のための素材とされることもある⁽¹⁾。

テクノスケープに対する認識は、従来から否定的であった。近代化を象徴するテクノスケープは既存の環境 (自然) を破壊する元凶と見なされた。しかしこのような評価はある意味では情緒的・流動的であり、工業化過程にあっては、住民は大量の煤煙を放出する煙突を「頼もしいもの」とみなした (須山 2004)。テクノスケープに対する評価は決して否定的なものばかりではなかった。

テクノスケープを含む景観を評価する場合、その審美的側面が強調される。テクノスケープを構成する素材は、多くの場合むきだしの金属やコンクリートであり、生産のロジックに貫かれた機能性を前面に出した無機的な建造物である。それらは木材や土石といった「自然な」素材や人間的な情感とは調和しない。しかし、川崎の石油化学コンビナートや羽田空港が見える公園は、夜になれば夜景の美しさにひかれたカップルが集うデートコースとなる。テクノスケープにおいても審美的に評価される側面は潜在する。しかしそれは工業がもつ「生産」という本来のコンテキストからははずれた位置にある。みなとみらい21のドックにせよ、石油化学コンビナートの夜景にせよ、テクノスケープは本来のコンテキストから切り離された部分で審美的評価がなされる。

一般に景観構成要素が肯定的に評価される場合には、周囲のコンテキストとの関係性が重要視される。この場合のコンテキストとは周囲に展開する既存の景観であり、周囲の景観とテクノスケープの関係性が問題となる。さらに関係性とは、テクノスケープと周囲の景観の間に存在する連続性/非連続性とも読み替えられる。

同化と異化は、周囲の景観との関係性でテクノスケープを評価する視点である。岡田 (2003) は、場所にとけ込み同化されたテクノスケープと、場所にとけ込んでいない異化されたテクノスケープを

識別した。本稿では岡田の定義に基づき、同化を「周囲の環境になじみ調和のとれた景観の構成」、異化を「周囲の環境と異質でなじみのよくない景観の構成」と再定義する。韓国における日本建築は、本来的に周囲の環境となじまない異化された景観であると予想できる。

記号論における異化作用は言語表現を活性化させるが、景観を論ずる場合は同化／異化は等価な概念である。すなわち、同化であれ異化であれ、景観にはある一定の効果がもたらされる。岡田は景観を評価する基準として同化・異化概念を利用し、肯定／否定を基準として、同化した景観は同化／埋没に分けられ、異化した景観では異化／排除に分けられると提案している。テクノスケープの場合には異化による肯定的評価がなされるとする。

本稿は以下の手順で分析を進める。第Ⅱ章では韓国におけるコロニアルタウンの形成過程を検討し、それらの特徴を他の植民地都市と比較しつつ明らかにする。第Ⅲ章では現存する日本建築を取りあげ、日本建築が実際にどのように利用されているかを検討し、それらがもつ空間的効果を、同化／異化の概念を採用して測定する。第Ⅳ章では、日本建築が現在の韓国の都市において有する効果とそれに対する評価を、公共空間／私的空間に分けて議論する。

第Ⅱ章では植民地時代に撮影された写真資料と地形図が、それ以降の章では2004・05年に撮影された景観写真が資料として用いられる。

Ⅱ 韓国におけるコロニアルタウンの形成

1 コロニアルタウンの成立背景と分布

韓国における近代的な都市計画は、朝鮮王朝が鎖国から開国に転換し、開港場を設けた1876年にさかのぼる。この年以降、^{インチョン}仁川・^{プサン}釜山・^{マサン}馬山・^{ウオンサン}群山・^{チンナム}木浦・^{ナム}鎮南浦(現 南浦, 以下北朝鮮)・^{ソウル}元山・^{ソンジン}城津(現 金策)・^{キムチュク}龍岩浦・^{ヨンナム}清津・^{チョンジン}新義州が開港場に、^{ピョンヤン}ソウルと平壤が開市に指定された。さらに釜山・元山・仁川・木浦・鎮南浦・馬山・群山・ソウル(漢城・龍山)・平壤には日本・アメリカ合衆国・フランス・イギリス・ドイツの共同・専管居留地が開設された(図1)。居留地は朝鮮政府が整備したが、その道路区画は従来朝鮮にはなかった方格状であり、外国の街路プランの影響を強く反映していた(キム 2003: 17-24)。

居留地の多くは1910年の日韓併合以降撤廃されたが、仁川とソウルの居留地には中国人が定着し、現在でも小規模なチャイナタウンが形成されている。⁽²⁾日韓併合以降、居留地は日本人居住地に転用された。旧居留地には、府庁舎などの行政機関・

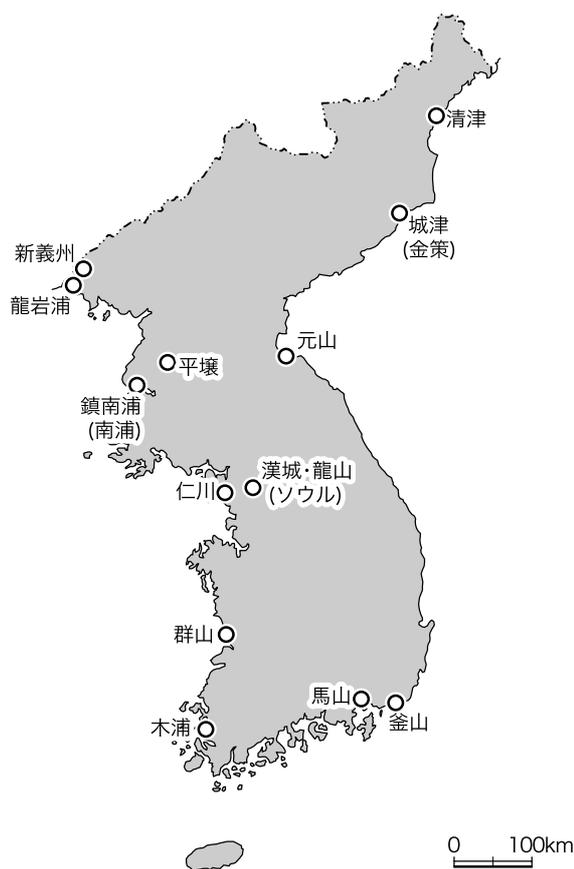


図1 朝鮮半島における開港場・開市場の分布

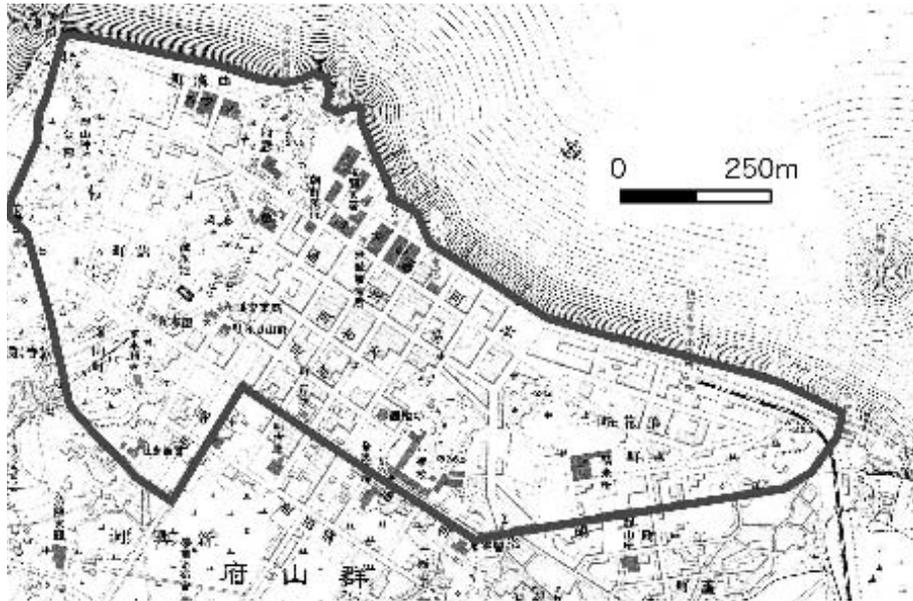


図2 群山市街地 (1916年)
(陸軍参謀本部陸地測量部作成1万分の1地形図)

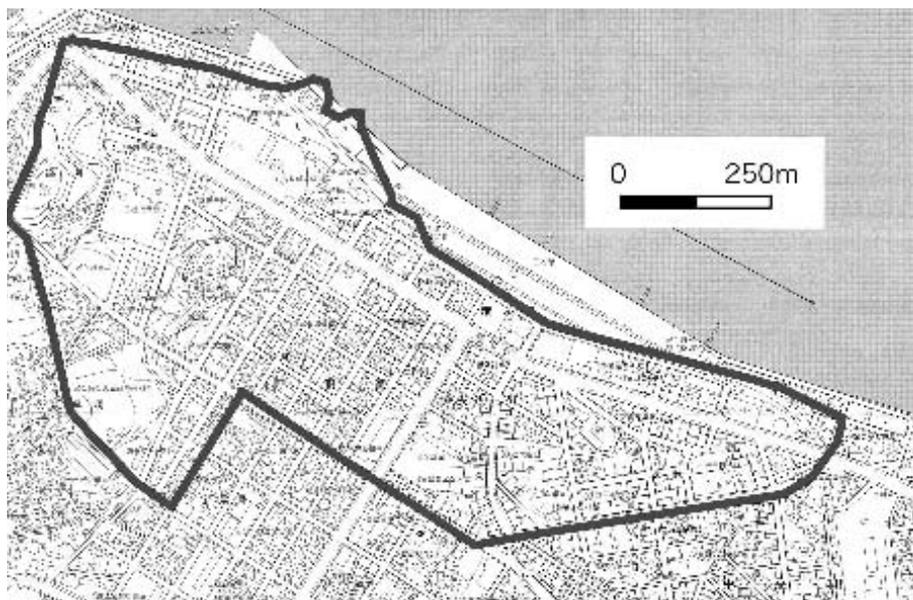


図3 群山市街地 (2003年)
(韓国国立地理院作成2,500分の1地形図)

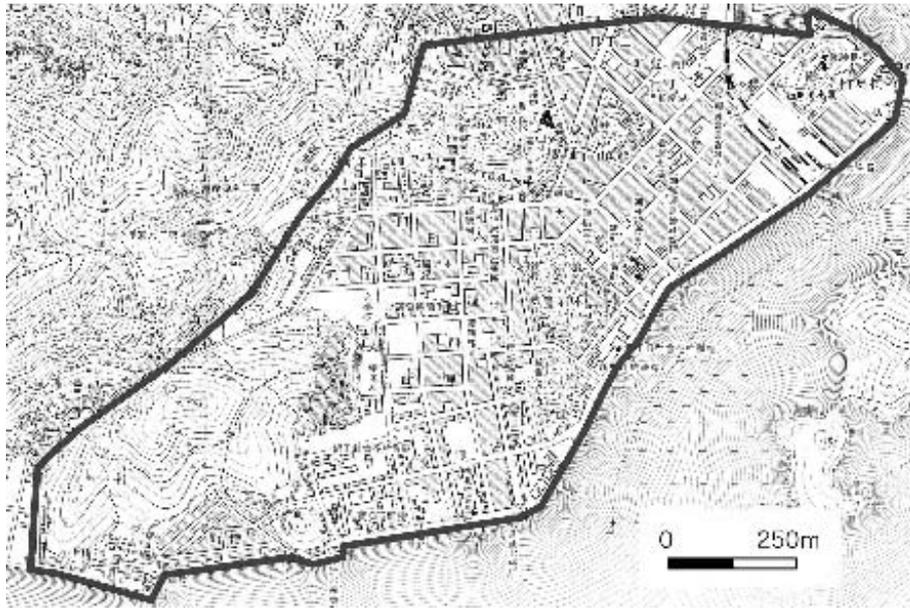


図4 木浦市街地（1932年）
（陸軍参謀本部陸地測量部作成1万分の1地形図）

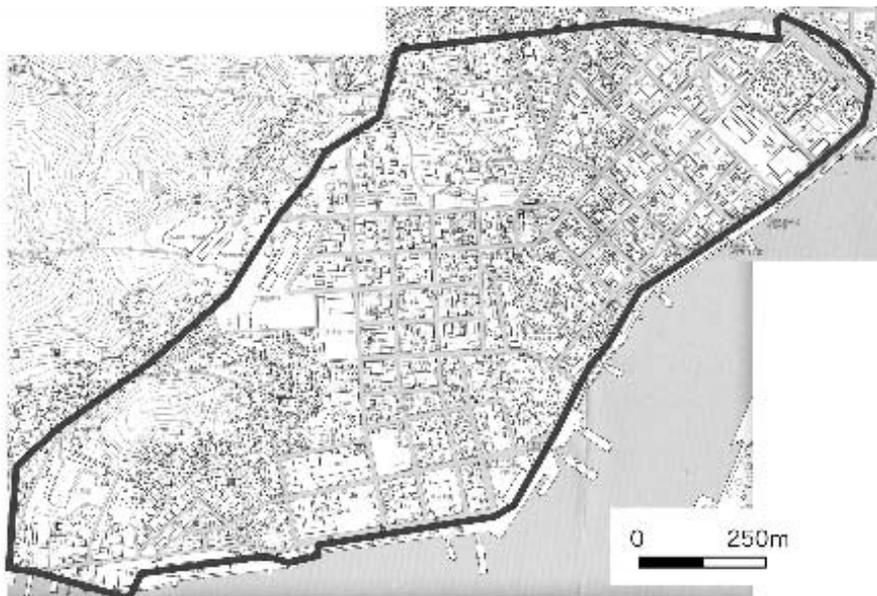


図5 木浦市街地（2003年）
（韓国国立地理院作成2,500分の1地形図）

銀行・拓殖会社・商社などの公共建築に加え、日本人居住者用の一戸建て住宅（邸宅）や集合住宅（長屋）が建設された。

図2および図3は1916年と2003年の群山市街地、図4と図5は1932年と2003年の木浦市街地の地形図である。これらの都市は開港場に指定され、日本の植民地支配下では府庁所在地とされた。

群山は錦江河口の都市で、日本への米の積出港であった。市街地は錦江に沿って東西約1kmに延びていた。市街地中心部の街路は方格状に区画され、東西方向の通りには、錦江側から本町通り・全州通り・大和町・旭町・明治町通り・横田町と、主に日本名が与えられた。都市の中心をなす群山港には浮き棧橋が6本設置され、棧橋の背後には米穀倉庫が並んでいた。群山港の北西端には群山税関支所・群山府庁・朝鮮銀行群山支店などが配置された。群山の都市機能の中核をなすこれらの施設は、錦江と明治通りにはさまれた地区に集中し、背後の全州通りから明治町通りにかけては集合住宅（長屋）が、明治通り以南には一戸建て住宅（邸宅）が配置された。長屋には港湾労働者や商店の従業員などの中・低所得層が、邸宅には上級官吏や企業の経営者・支配人などが居住した。とくに明治通り南側の曙町は緩やかな斜面で、高級住宅地とされた。また、群山では都市インフラストラクチャの整備が進み、1930年代にはすでに上下水道が開通していた。

木浦は全羅道南端に位置し、米および木綿の積出港とされた。開港場は干潟を埋め立てて造成され、群山と同様の方格状地割が採用された。諭達山（儒達山⁽³⁾）から東に延びる稜線の山麓部に位置する木浦府庁は、開港時に日本領事館として建てられた庁舎をそのまま利用した。府庁周辺には警察署・通信海事出張所・法院支庁などの中枢管理機能が集中した。港湾機能が配置された海岸通りおよび寿町から祝町にかけては、朝鮮銀行・殖産銀行・旧朝鮮銀行の支店、および棉花会社の工場や商社支店が立地し、経済機能の高度な集積がみられた。

木浦は開港場とされた地区と北部の朝鮮人居住区（韓人村）に画然と区分されていた（写真1）。開港場が整然とした方格状地割であるのに対して、韓人村は不定型な道路区画が卓越する。また、地名には洞・里といった朝鮮の呼称が用いられている。写真によると、諭達山の北側斜面に形成された韓人村には、カヤ葺きで縄をかけた屋根を有する全羅道に特徴的な家屋が分布していた。一方で、開港場には木造2階建て瓦葺きの商家が櫛比し、韓人村と顕著な対照を見せた。

写真2は1920年代の群山開港場の景観である。正面に見える豪壮な寄せ棟屋根をもつ建物は、旧朝鮮銀行群山支店である。旧朝鮮銀行群山支店は煉瓦造の西洋風建築であり、群山税関支所とともに群山を代表する西洋式建築物であった。周囲の家屋は木造2階建ての切り妻屋根が主で、1階部分の庇が長く、屋根瓦を漆喰で留めているところから、西日本の建築様式が採用されていると考えられる。木浦開港場の景観をみても、木造瓦葺き2階建ての商家が連続していた（写真3）。さらに街路に面して電柱が並び、すでに電力が供給されていたことを示す。当時の開港場には、日本国内の都市と同様の都市景観が展開していた。

群山・木浦ともに、植民地支配期に形成された街路区画が、現在でもそのまま踏襲されている。また、街路のみならず日本建築自体が相当数残存し、現在でも実際に利用されている。いったん形成されたインフラストラクチャは、たとえそれが他国の支配者によるものであっても、継続的に利用されることによって、これらの都市の景観を特徴づける。

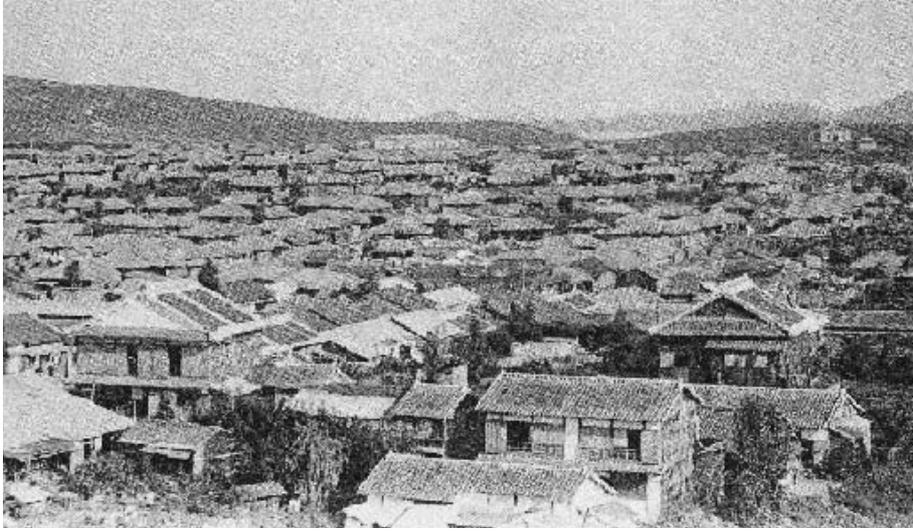


写真1 木浦日本人居住地と韓人村（1920年代）（『写真デミル近代韓国 上』より）



写真2 旧朝鮮銀行群山支店（1920年代）（『写真デミル近代韓国 上』より）

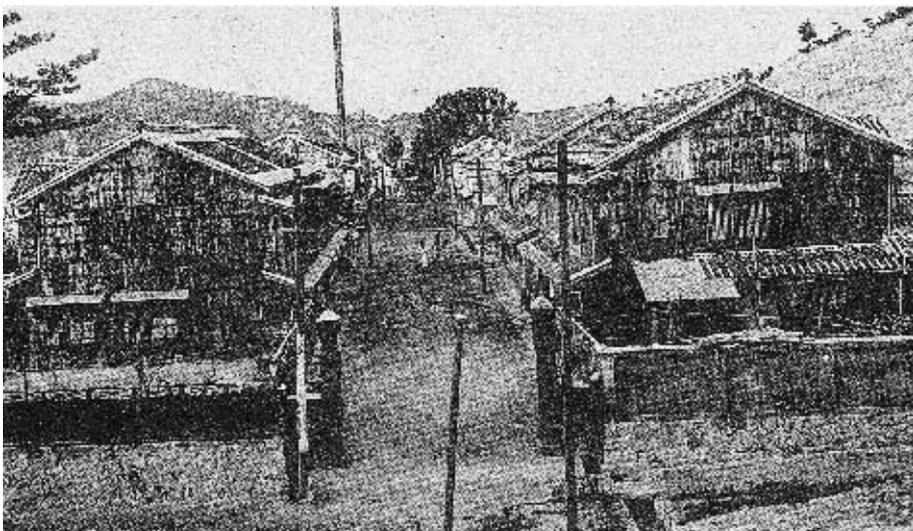


写真3 木浦日本人居留地（桜町）（1920年代）（『写真デミル近代韓国 上』より）

2 コロニアルタウンの景観的特徴

スペイン・ポルトガル・フランス・オランダ・イギリスなどが経営した植民地では、一般に本国のライフスタイルが導入され、本国の都市をモデルとした都市計画に基づいて植民地都市が建設された。植民地都市では本国と同様の生活を再現することに主眼がおかれた。そのため、支配されたホスト国の文化的コンテクストは無視され、支配国の論理が都市景観において強要された。その結果形成された植民地都市の景観は、ホスト国の既存の景観とはまったく異質の、不連続性を有する。

ホスト国の文化は排除の対象となり、植民地都市にホスト国の要素が取り入れられる場合は、異国趣味による演出が施される場合に限定された。支配国民とホスト国民の居住地は隔離され、双方の文化が融合する機会は少なかった。

しかし、支配国の文化がオリジナルのまま植民地都市において展開することはむしろ少なく、支配国文化が誇張され、より強度なデフォルメが加えられることもあった。いわゆるコロニアルスタイルの特徴は、いずれも本国における建築を誇張した点にある。このような例は、アフリカ・インド・東南アジアなどに分布する旧イギリス領の高原保養都市（hill station）やアメリカ合衆国南部に顕著に見いだされる（市川ほか 1984）。高原保養都市は、インドのダージリンやマレーシアのキャメロンハイランドなどに代表され、現在では高級リゾート地となっているものも多い。日本の軽井沢や那須も外国人宣教師が開発した一種のヒルステーションである（内田 1989）。旧英領植民地におけるコロニアルスタイルは、イギリスの古典主義建築を土台としている。このような本国文化の強調は、支配者としての権威の誇示と、植民地におけるそれを実現するだけの富の収奪に起因した。

日本が朝鮮半島各地に形成したコロニアルタウンでも、このような特徴が顕著にみられる。すなわち、日本が主導した近代的都市計画では、従来の朝鮮半島にはなかった方格状地割が採用され、そこに日本式の建物群が建設された。写真1にみられるように、日本建築は従来の朝鮮家屋とは相容れず、強力な異化効果をもち、開港場と韓人村は空間的にも景観的にも分離・隔離された。日本式建築物は、民間の住宅をはじめ、店舗・寺社などに多くみられた。



写真4 旧東洋殖産株式会社木浦支店（2005年3月撮影）



写真5 旧朝鮮総督府庁舎（1987年7月撮影）

しかし朝鮮半島のコロニアルタウンには、ヨーロッパ列強が建設した植民地都市と大きく異なる特徴がある。朝鮮半島のコロニアルタウンの建築物は、支配国である日本の建築様式に則った日本式建築物と、西洋式建築物から構成される。コロニアルタウンの日本式建築物にも、イギリスのコロニアルスタイルと同様、日本文化の様式を誇張した側面がうかがえるものの、さほど強度の誇張とはいえない。日本が建設したコロニアルタウンにおける景観の特徴は、むしろ西洋式建築物の多用にある。朝鮮半島におけるコロニアルタウンの主張は、朝鮮に対する日本の優越を示すことであったと考えられる。20世紀初期のアジアにおいて国家の優越性を誇示する手段は、自国文化の強調よりも西洋文化の受容と咀嚼であった。すなわち、華麗で堅牢な西洋式建築物をコロニアルタウンに配置することで、日本は朝鮮に対する優越性を示そうとした。西洋式建築物は、官庁・金融機関・公共施設で多用された。

写真4は木浦の旧東洋拓殖株式会社（以下、東拓と略称する）木浦支店、写真5はソウルの旧朝鮮総督府である。東拓は朝鮮の植民地支配を推進するために設立された国策会社⁽⁴⁾で、現存する旧木浦支店は木浦府庁南側の本町に1920年に建設された。建物はコンクリート造2階建てでいわゆる帝冠様式のファサードが採用された⁽⁵⁾。帝冠様式は西洋式建築に日本の建築様式を取り入れた折衷様式である。朝鮮総督府庁舎は朝鮮王朝の王宮である慶福宮に建設された。慶福宮は風水地理説上の最重要地点に当たり、ここに支配者の拠点となる施設が建設されたことは、朝鮮人に対する民族的な誇りを踏みにじる行為であるとされている。朝鮮総督府庁舎は、韓国独立後も長く政府庁舎として利用されたが、1995年に爆破解体された。しかし東拓木浦支店は現存し、保存か破壊かで木浦市民の間で議論が続いている。

朝鮮のコロニアルタウンにおける日本建築の特徴は、木造を主体とした日本式の民家・店舗や寺社と、公共施設をはじめとする石造・コンクリート造の西洋式建築物の組み合わせにあった。日本式建築物は日本文化の精華を誇示するためのディスプレイであった。同時に西洋式建築物は日本が近代化に成功し、朝鮮半島を支配するにふさわしい世界の一等国であることを示すシンボルとして作用したものと考えられる。

日本式・西洋式建築物は、朝鮮の既存の建築と比較して強烈なまでの異化効果を生んだ。さらに、西洋式建築物が有する近代化のシンボル機能は、日本の植民地支配を正当化する道具として利用され

たといえよう。

Ⅲ 日本建築への対応と空間的効果

本章では主に群山と木浦のコロニアルタウンを対象に、現存する日本建築がどのように利用されているかを示し、日本建築が有する空間的効果について考察する。

1 日本建築への対応

日本がコロニアルタウンに残した建築物には、朝鮮戦争や1970年代の高度経済成長によって破壊されたものが多い。また、建築後すでに70年以上が経過し、現存する日本建築の老朽化が進んでいる。しかし、日本建築のすべてが破壊・消去の対象であったとはいえない。日本建築への対応には、破壊に加えて、利用および保存という2つの方策もみられる。

破壊は、韓国人の生活様式や価値観にそぐわない建築を取り除き、韓国的な様式に対応した都市を新たに構築するための行為である。破壊には、他国に支配に甘んじた過去の清算と、痕跡の消去という意味があろう。この対象とされた代表的な建築物は、日本の建築様式がもつとも端的に表現され、宗教的価値観を機能の根幹に有する、神社・寺院といった宗教施設であった。写真6は群山開港場の西側に存在した群山神社である。群山神社の痕跡はすでにまったくなく、神社跡地は現在公園として利用され、港湾都市群山を象徴する守市塔が置かれている。また、旧群山神社脇にある興川寺フンチョンサは、植民地時代には、日蓮宗の安国寺であった。安国寺時代の堂宇は1970年代に破壊された。



写真6 旧群山神社（撮影年代不詳）
（『群山歴史物語』より）



写真7 群山の長屋（2005年3月撮影）



写真8 旧木浦府庁舎（2005年3月撮影）

利用は日本建築の機能が維持され、継続的に使用され続けることを意味する。これに該当する対応は、一般住宅、とくに長屋において多くみられる⁽⁶⁾。植民地時代に建設された長屋は、現在においてもなお、都市内部の住宅インフラストラクチャとしての機能を維持し続けている。1960年代までは、韓国都市部における住宅整備は進展せず、植民地時代に整備された長屋には、依然、住宅として利用可能であった。とくに群山では、長屋にまで上下水道が設置され、長屋に住むことは都市的生活の利便性を享受することを意味した。写真7は群山市永和洞（旧旭町）の長屋である。群山の長屋には、写真のように街路に面して並ぶものと、街路から垂直に設けられた路地の両側に面するものの2種類がある。写真7の長屋では1棟に1世帯が割り当てられているが、1棟を2世帯で使用する棟割り長屋もある。写真の長屋は壁が塗り直され、オンドルの煙突がみえるなど改築が施されているが、直線状の棟や屋根下の庇などは建築当時のままである。

機能を維持したままの日本建築の利用は、住宅のみならず公共建築においてもみられる。前述の旧木浦府庁舎は、韓国独立後も木浦市庁舎として利用され、現在は市立図書館の一部とされている（写真8⁽⁷⁾）。公共建築の継続利用は韓国各地でみられ、ソウルの市庁舎（旧京城府庁舎）・新世界百貨店（旧三越京城店）・ソウル駅（旧京城駅）舎などが知られる⁽⁸⁾。石造・コンクリート造の公共建築は堅牢で、朝鮮戦争の戦火にも耐えられたことが、利用継続の理由である。

日本建築に対する第3の対応が保存である。日本建築が保存の対象となりうることは、これらがすでに歴史的遺産としての価値を持ちはじめたことを意味する。ただし、この場合の「遺産」という語



写真9 旧朝鮮銀行群山支店 (2005年3月撮影)



写真10 群山の邸宅 (2005年3月撮影)

に、否定的なニュアンスが含まれていることはいうまでもない。すなわち、日本の植民地支配を記憶するためのモニュメントとしてこれらの建造物は位置づけられる。写真9は旧朝鮮銀行群山支店の現在の景観である。この建物は1990年代末までナイトクラブとして利用されていたが、その後所有者が変わり、現在は利用されていない。群山市ではこの建物を保存したい意向だが、所有権が複雑に錯綜しているため、保全措置がとれないまま現在にいたっている。写真4の旧東拓木浦支店は、保存に対する賛否が盛んに議論された。建物内部の詳細図面は未見であるが、地下には拷問部屋があるとされ、日本の植民地支配に対する恐怖と「恨」のまなざしが向けられた建物である⁽⁹⁾。保存か破壊かの議論は今なお続いているが、木浦市庁では当面の建物保全工事を進めている。

保存は公共建築のみならず、邸宅においても見いだせる。邸宅には現在も住居として利用されてい

るものも多いが、所有者が不在となり、市が管理しているものもある。写真10は群山を拠点とした米穀商、広瀬慶三郎の邸宅である。広瀬邸は独立後、韓人事業家の屋敷となったが、現在では群山市が管理している。建物の主な部分は数寄屋造りで、日本式の庭園をもつ。群山市内には日本人商人の邸宅や府庁の高級官吏に支給された官舎が現在でも残る。

2 日本建築の空間的効果

コロニアルタウンの日本建築が有する空間的効果は、基本的には周囲の景観とは質的に異なる異化効果である。異化された建築物に対する韓国人の評価は否定的なものが主体であろうと予測されたが、現実には機能を維持したまま利用されるもの、積極的に保存されるものもあることが明らかとなった。本節では、残存する日本建築が有する空間的効果とその意義について考察する。

(1) 同化の過程

元来は強力な異化効果を有し、ホスト国文化を圧倒した日本建築であったが、独立後約半世紀を経



写真11 日本建築に入居した食堂（馬山）（2005年1月撮影）



写真12 日本建築に入居した商店（木浦）（2004年9月撮影）



写真13 日本建築に入居した食堂（群山）（2005年3月撮影）

て、周囲の景観への同化が進みつつある。

日本建築の破壊は、同化への最初の段階である。破壊された建築物は神社・寺院など宗教イデオロギーをまとった日本式建築物であった。これらのほとんどは、現在まったく異なる土地利用がなされている。前述の群山神社は公園に、木浦港口にあった松島神社は住宅地に転用されている。一方で、歴史的慣性を維持しつつ教会に転用された木浦の東本願寺布教所のような例もある。例外的に、群山にあった錦江寺のみは、現在も東国寺^{トングッサ}という寺院として利用されているが、ここは錦江寺の当時から日朝折衷の建築様式であった。

同化が進む日本建築は、都市的インフラストラクチャとして継続的に利用された商店や住宅において顕著である。写真11は馬山の日本建築に入居した食堂である。この建物は重厚な2階建て入母屋造りであることから、元来は商店であったと考えられる。建物の構造はほとんど変わっていないが、屋根瓦は青く塗ったコンクリートで覆われ、1階部分にはほかの食堂と同様、大きな看板が掲げられている。窓にはメニューが大書され、建物全体を見ない限りは、これが日本建築であることはわからない。青いコンクリートは台風で瓦が飛ばされないようにする対策ではあるが、客寄せのための装飾



写真14 同化が進行する長屋（群山）（2005年3月撮影）

も兼ねたものと思われる。また、1階入り口の扉は、元来引き分け戸であったと思われるが、スウィングドアにされている。

看板は韓国の都市景観を特徴づける大きな要素である。派手な色遣いの大きな看板を掲げ、商品を大書することで、商いの内容が建築に組み込まれる。その際、建築物の特徴を生かすための配慮はなされない(写真11~13)。建物はただ、営業するための場としてのみ認識され、文字による過剰なディスプレイがそれを覆い包む。これは日本建築に入居した商店のみならず、韓国の商店で一般的にみられる手法である。建築の個性は、看板に象徴される経営者の経営意欲に呑み込まれ、結果的に日本建築は韓国の一般的な都市景観に同化する。

韓国の都市景観への同化は、長屋においても見いだされる。写真14は、写真7と同じ街路に並ぶ長屋である。この家屋は間口2間半の比較的小規模な住宅で、内部には2部屋の居室がある。元来は畳が敷かれた和室であったが、建物の右側に煙突があることから、オンドルが設置されていることがわかる。また、壁は全体にモルタルが吹きつけられ、下側1mの高さにタイル装飾が施されている。窓の建具は従来からのものが利用されているが、入り口扉はアルミのスウィングドアに改められている。日本建築の住宅は、日本のライフスタイルに基づいて造られているため、そのままでは韓国人の生活に供するには不便である。群山は朝鮮半島では南部に位置するが、冬季には氷点下10℃を下回ることも稀ではない。オンドルの設置やモルタルの吹きつけは、防寒のために最低限必要な改造であった。



写真15 同化が進行する長屋(木浦)(2004年9月撮影)

写真15は木浦の棟割り長屋である。写真中央から右側へ続く長屋は、元来1棟に4世帯が入居していた。独立後に所有者がそれぞれ個別に改築を施したことがわかる。右から2軒目は完全に建て直され、全羅道の家屋の特徴である切り妻が飛び出した屋根を有している。ほかの3軒は元来の建築を部分的に改修して利用を継続している。写真中央の建物が元来の姿をもっとも色濃くとどめ、右端の建物は屋根瓦を青いトタン板で覆っている。左から2軒目では屋根瓦を濃紺色に葺き替えている。一般住宅では、屋根形が家屋を強く特徴づける。この4軒では、1軒が全面的な建て直しによって韓国の既存の景観に回帰し、1軒が青いトタン板で屋根を覆うことで異化効果を弱めている。濃紺色の屋根瓦は日韓に共通するが、韓国の既存の景観への同化と考えられよう。



写真16 大韓通運マート群山店（2005年3月撮影）

写真16は、韓国有数の物流企業である大韓通運が経営する群山のスーパーマーケットである。このスーパーマーケットは植民地時代に建設された米穀倉庫をそのまま転用している。大韓通運はこの倉庫を独立当時に引き継いだものと考えられる。倉庫はスーパーマーケットにはそぐわない建物であるが、内部に柱が少なく、広い店舗スペースを確保できることから、大規模小売店舗に適している。店舗の外観はベージュ色に塗り替えられているものの、この建物が倉庫であったことは明らかである。建築物としての倉庫は依然として異化効果を放っているが、スーパーマーケットに転用されたことで、この倉庫群は同化への道をたどりはじめたといえよう。

長屋にみられる日本建築の同化の過程は、韓国的なライフスタイルへの適応の結果生じた。とくに建築物の老朽化にともなう改築が、同化への契機となったと考えられる。今後、長屋の老朽化が進展するにしたがって、建物の改築や新築が増加すると予想される。改築や新築による建物の更新の結果、長屋を含む一般住宅地域においては、日本建築が韓国の景観に同化してゆくと考えられる。

（2）異化効果の活用

多くの日本建築が韓国の景観に同化するプロセスをたどる一方で、日本建築が有する異化効果を逆に活用する例もみられる。異化された景観が見るものに与える効果には、落ち着きのなさや不安感と同時に、新規性や珍奇性も含まれよう。後者は商業活動を営む上では有利に作用する景観効果である。

飲食店は異化効果を営業上もっとも積極的に活用している業種である。写真17は群山の韓定食専門店である。韓定食は韓国料理のなかでも高級料理とされる。この店では高級イメージの演出に、日本建築の異化効果を利用している。この店の入口からの外観は、紛う方なく日本を示している。前庭の樹木の配置や石灯籠は、日本式庭園の様式を踏襲し、家屋そのものも植民地時代の日本の邸宅を利用している。また、ほかの食堂とは異なり、看板が比較的小さく、漢字表記がなされている。

写真18は、群山府庁の高級官吏の官舎を利用した韓式料理店の内部である。この料理店でも、元来の間取りをほぼそのまま利用して店舗に転用している。写真は2階の座敷に相当する部屋で、かつては畳敷きであった。鴨居には欄間がはめ込まれていた跡があり、写真右側には床の間もみられる。しかし壁土が塗られていたであろう壁面はすべてビニールクロス of 壁紙で覆われ、当然のことながら畳は除かれてオンドルが設置されている。この食堂でも、日本建築は強く意識され、看板は小さく、入



写真17 邸宅を利用した飲食店（群山）（2005年3月撮影）



写真18 邸宅を利用した飲食店の内部（群山）（2005年3月撮影）



写真19 日本建築を利用したカラオケ店（群山）（2005年3月撮影）

口には石灯籠がおかれている。

食文化における韓国人の日本に対するイメージはきわめて良好である。清潔な室内空間と美しい盛りつけが、日本料理を特徴づける。日本的な外観や内装は、こと飲食業に限っては客の信用を勝ち取るための効果的な材料となりうる。

また、飲食業以外でも、建物そのものをディスプレイとして利用する例は、カラオケハウスやブティックなど、主に若い世代を顧客層とする店舗にみることができた（写真19）。植民地支配の実体験がない若年世代では、日本建築に対するこだわりが比較的稀薄なものと考えられる。しかし写真19の建物はいわゆる日本イメージからは遠く、この店舗の経営者は、韓国の店舗建築との対比で発生する異化効果を楽しんでいるといえよう。

日本建築の異化効果を商業的に活用する例は、日本に対する肯定的なイメージを利用する場合や、日本イメージと建築物を切り離した場合など、特定の条件が満たされた場合に限られる。それらの条件がそろわない場合、日本建築は単なる営業活動の場と認識され、韓国的な装飾や表現に埋没して同化の道をたどる。

一方、公共建築が有する異化効果は、都市の歴史を象徴する作用をもたらす。前述の東拓木浦支店や旧木浦府庁舎、さらには旧朝鮮銀行群山支店は、一見して韓国的ならざる建築であり、日本の植民地支配を想起させるに十分な外観をもつ。保存の対象となりうる日本建築は、このような強力な異化効果を有する建築物である。しかしながら、純粋に日本的な神社・寺院建築は破壊の対象とされ、日本的な要素が稀薄でありながら植民地支配の歴史のみを思い起こさせる建築物、すなわち西洋式建築が選択的に保存の対象とされた。

このことから以下のような推論が可能であろう。現在の韓国人にとって日本そのもののイメージは受け入れがたいが、植民地支配の事実を直視することは可能である。日本のイメージを視覚的にもたらす神社の鳥居や寺院建築は、韓国独立直後に破壊された。しかし、西洋式建築の公共施設は、その後も長く継続的に利用され、現在は保存の対象となっている。日本式建築物・西洋式建築物ともに、



写真20 木浦の邸宅（2004年9月撮影）

韓国の建築とは外見上まったく異なることに変わりはない。韓国人が排除しようとしたのは、異化された景観全般ではなく、日本イメージそのものであった。

しかしながら、韓国人の日本建築に対する評価がすべからく否定的であるわけではない。個人のレベルでは、日本建築の審美的側面が肯定的に評価されることもある。とくにかつて富裕層や高級官吏が居住した邸宅や官舎は、現在居住・管理している韓国人によって積極的に利用・保全されている。

写真20は木浦市錦洞（旧柳町）の邸宅である。この建物は九州にみられる建築であり、もとの所有者は九州の出身者であることが推定できる。この住宅の最大の特徴は正面から見える2つの入母屋と、屋根瓦と漆喰が織りなすリズムミカルな屋根のパターンである。前庭にはシュロ科の樹木が植栽され、アクセントをなしている。この建物が放つ異化効果の源泉は、これらの要素の組み合わせである。屋根がきれいに補修されていることから、この建物の所有者が漆喰と瓦が織りなすパターンを愛でていることがうかがえる。この屋根は周囲の邸宅と比較しても、強力な異化効果を生んでいる。この邸宅は、日本建築が肯定的に評価され、住民に受け入れられた例とみることができるが、日本イメージの



写真21 群山の赤煉瓦倉庫（2005年3月撮影）

みがこの建物の表現するテーマではない。この建物は単に日本的要素のみならず、漆喰屋根が醸し出す「南方」の要素が加わって、はじめて肯定されたと考えられる。この邸宅が表現するテーマは純粋な日本だけではなく、韓国人の憧れる温暖な南方のイメージでもある。漆喰と瓦のコントラストは、台風に備えた西日本太平洋側の海岸地域から沖縄にかけての家屋に特徴的な要素であり、シュロ科の樹木はいうまでもなく「南方」イメージを喚起させる素材である。すなわち、日本建築が肯定的に利用される場合であってさえ、そのみで受け入れられることはない。日本イメージの本質的な部分からはずれたある種の「はずし」「ずらし」が施されたり、ほかのイメージが焼き込まれた場合においてのみ、日本式建築物は評価されているといえよう。

また、コロニアルタウンには住民にも認識されず、ひっそりと異化効果を放つ建築物もある。赤煉瓦造りの倉庫がそれである。写真21は群山の赤煉瓦倉庫である。赤煉瓦倉庫が強力な異化効果をもつことは、日本の小樽や佐世保の赤煉瓦倉庫群が近年になって再評価されていることを想起すれば容易に理解できよう（山本 2005）。しかしコロニアルタウンの赤煉瓦倉庫のほとんどは、前述の大韓通運スーパーのように、外壁がモルタルやトタン板で覆われ、一見してそれとわかることはない。住民・行政もこれに留意することはなく、広い面積を専有する赤煉瓦倉庫は、早い段階から破壊の対象とされてきた⁽¹⁰⁾。

IV 日本建築の利用と評価

1 日本建築の利用戦略

以上の分析により、コロニアルタウンの日本建築がかならずしもすべて破壊・消去されず、現在も利用され続けていることが明らかとなった。本節では、日本建築を利用する際に採用された戦略を整理する。

日本建築の多くは破壊されたが、その対象となったのは、宗教的イデオロギーを強くまとった神社・寺院であった。これらはきわめて強力な異化効果を有していたため、景観から積極的に排除された。これらが排除されたあとには公園や教会が整備され、韓国の景観に同化した。

第1の利用戦略は都市的インフラストラクチャとして、日本建築が従来保持していた機能をそのまま活用することである。これはおもに住宅、とくに長屋でみられた。高度経済成長期以前の韓国では、人口の向都離村傾向が顕在化したにもかかわらず、都市における住宅供給政策は進展せず、植民地時代に建設された日本建築の住宅がそのまま韓国人の住宅に転用された。バラック建ての臨時的な住宅が大半を占める都市域にあって、日本建築は長屋であってさえも相対的に住環境が良好な住宅であった。しかし、日本のスタイルをそのまま導入した日本建築は、韓国人の生活様式には当然適合せず、オンドルの設置や外壁の更新などによって韓国の景観への同化が進んだ。

このような同化は、店舗に転用された日本建築においてより顕著であった。大きな文字と原色の色遣いで派手にディスプレイされた看板を店頭に掲げることで、日本建築がもつ個性は減殺され、韓国一般の店舗と何ら変わりのない外観をもつにいった。すなわち、居住や営業といった、建築物本来の機能を継続することは、かえって日本建築のもつ特徴を消し去ることにつながった。

公共建築においても、西洋式建築物に限っては、高度成長期まではオフィス・中枢管理機能を維持

したまま利用された。木浦においても東拓木浦支店や旧木浦府庁舎は海軍・市庁の施設として利用された。西洋式建築物の利用は、その堅牢性に負うところが大きい。同時に、西洋式建築物は強力な異化効果を周囲に放った。行政や軍隊は、使える建物を利用した側面がある一方で、日本が造ったことを知りつつ、西洋式建築物の異化効果を自らの権威の表現として転用した。

第2に、日本建築の異化効果に着目して、植民地支配とは異なる文脈でこれらを再評価する方策がとられた。飲食店では、日本料理に対する肯定的なイメージを喚起するために、意図的に日本式建築物が選択された。これらの料理店では日本的な外観を強調し、韓国的な装飾を抑制する傾向が見られる。また、カラオケ・ブティックといった若年層を顧客とする店舗では、韓国的ならざる建築構造を重視した店舗設計が指向された結果、残存する日本式建築物が店舗として利用された。しかしながら、日本建築の再評価は決して日本イメージの再評価ではなく、あくまで韓国の景観とは異なるものの活用にすぎない。したがって、日本建築への再評価には、料理店にみられる日本イメージの活用と、その他の店舗にみられる非韓国的イメージの強調という2つのベクトルが存在することに留意しなければならない。すなわち、日本建築の再評価は、韓国人にとって有利な条件がそろった場合にのみ、それらが本来有する文脈とは別の次元でなされる。

第3は、日本建築の審美的側面を肯定的にとらえ、これを積極的に露出する考え方である。この方策は、経済的に富裕な階層によって建築された邸宅においてみられた。これらの邸宅では、植民地時代の建築がほぼそのまま残され、周囲の住宅とはひととき異なる姿を露わにしている。しかし、これらの建築は京都や東京にみられる典型的な日本式住宅というよりは、より温暖な「南方」をイメージさせる。すなわち、日本建築に対する肯定的評価とはいえ、そのみをテーマとした建築は受け入れられず、ほかの要素が併存したり、本質的な部分からあえて視線をそらすことで建築が維持されているといえよう。

最後に、歴史的な遺産としての価値が見いだされ、保存の対象となる建築物もある。前述の東拓木浦支店・木浦府庁舎・旧朝鮮銀行群山支店・群山税関支所などの公共建築群は保存の対象となるか、保存が議論されている。これらは韓国の暗黒の歴史を物語る負の遺産であるが、同時に都市を象徴する建築物でもある。事実、これらの建築物は高度経済成長期までは、政府や軍隊の権威を示す建物として利用された。

これらの建築物はすべて西洋式建築であり、何の知識もなくこれらを見る者が、日本を直接的にイメージすることはない。日本を直接想起させる神社や寺院はすでに破壊され、現在のコロニアルタウンに残る建築物はある意味で「無難な」もののみであるといえよう。日本建築は、独立後、韓国人の価値基準によってフィルターにかけられ、韓国人にとって受け入れ可能なものだけが残った。

2 日本建築に対する評価

コロニアルタウンの日本建築は、同化／異化という対照的な効果を有すると同時に、破壊・利用・保存という異なる対応によって、多様な景観を現在示している。このような対応の差異は、コロニアルタウンの日本建築が等質ではなく、さまざまな要素を複合した多様性をはらむ存在であったことに起因しよう。すなわち、日本建築とはいえ、その中には日本式建築物と西洋式建築物が混在し、用途の上でも官庁・銀行などの公共建築と、住宅をはじめとする私的な建築が併存する。ここでは、コロ

ニアルタウンを公共空間と私的空間に大別し、それぞれの空間内部における日本建築の評価を考察したい。

公共空間では、日本式建築／西洋式建築が評価の軸となる。端的に言えば、日本式建築物は破壊の対象であり、西洋式建築は利用・保存の対象であった。両者がともに有する根本的な効果は異化であるが、日本式建築物の異化効果は韓国人にとって受け入れがたいものであった。一方、西洋式建築物が有する異化効果は非日本的である。それゆえに西洋式建築物は継続的に利用され、ときには政治権力の権威化にも利用された。さらに、建物の更新期に入っても西洋式建築物は保存され、その結果、コロニアルタウンの公共空間においては、西洋式建築物のみが残存した。西洋式建築物はすでに建築物としての機能を失いつつあるが、植民地支配の記憶をとどめるシンボルとしての意味づけを与えられた。西洋式建築物が残存することで、コロニアルタウンの景観は一種の無国籍性を帯びるにいたった。

私的空間において日本建築を大別する座標は、長屋と邸宅である。両者の根本的な相違点は建物と敷地の規模、および建築の質である。邸宅は長屋に比べて規模が大きく、贅沢な建築である。長屋、とくに棟割りの場合は1棟に複数の世帯が入居することを前提とした簡素な造りである。

長屋は居住機能を維持したまま利用され、多くの場合韓国的なライフスタイルに適合した更新がなされた結果、韓国の景観に同化してきた。店舗に転用された場合は同化の速度がいっそう急速で、派手な看板によって建築の特徴が隠蔽されてしまった。しかし、日本式建築物の異化効果を商業的に活用する経営者たちは、顧客の目を引くディスプレイとしてこれを利用している。

一方、邸宅では手の込んだ日本建築の異化効果を、日本に対する肯定的イメージに結びつける飲食店がある。また、日本建築の審美的側面に対する肯定的評価から、原形をほぼとどめた邸宅も存在する。

公共空間では西洋式建築物のみが残存したのに対し、私的空間では、所有者・経営者の意図を反映して多様な利用形態がみられた。私的空間における日本建築への対応は保存ではなく利用に重点が置かれる。すなわち、日本建築を現存する資源ととらえ、日常の生活や営業活動のなかで更新しつつも活用する方向性である。

V おわりに

本稿では韓国のコロニアルタウンに現存する日本建築に対する評価の実態を明らかにすることを目的とし、群山と木浦を事例に分析を進めた。その際の分析視角として同化／異化を採用し、建築の属性、空間的性格の相違による利用の差異を検討した。

本稿で明らかとなった日本建築に対する評価と対応をまとめると表1のようになる。日本建築がもたらす効果には同化と異化があるが、それらに対する対応には破壊・利用・保存があった。さらに、日本建築の利用戦略には、機能の維持・再評価・肯定・保存の4種類があった。日本式建築物の典型である神社・寺院は早い段階で破壊されすでに痕跡はない。このような破壊は同化に向かう第一歩であった。

同化は建築物の本来の機能に則った利用が継続される場合にあらわれ、とくに私的空間の長屋において顕著にみられた。建築が本来の機能を維持し続けるために、当初それが有していた異化効果を減殺し、韓国のライフスタイルに適合するよう更新を加えた結果、これらの建築は同化的利用のプロセ

表1 コロニアルタウンにおける景観構成 (2005年)

| 効果 対応 | 同 化 | | 異 化 | |
|----------|--------------------------|-----------|-----------------------------------|-----------|
| | 日本式建築 | 西洋式建築 | 日本式建築 | 西洋式建築 |
| 破 壊 | ×公(寺社) (老朽化による更新) | ×公(朝鮮総督府) | — | — |
| 利 用 | ■私(長屋) ■私(店舗) | — | ●私(長屋→店舗) ●私(邸宅→飲食店) ▲私(邸宅) | ■公(官庁・銀行) |
| 保 存 | — | — | ★私(邸宅) | ★公(官庁・銀行) |

利用戦略 ■ 機能維持 ● 再評価 ▲ 肯定 ★ 保存 × 否定
 空間の区分 公 公共空間 私 私的空間 (現地調査により作成)

スをとどめた。長屋が転用された店舗においてはそれがとくに顕著にみられた。

一方、異化効果の活用は日本建築に対する再評価、または新たな意味づけをもたらし、邸宅を利用した飲食店や長屋に入居した小売・サービス業で異化効果を利用した店舗がみられた。またこれらとともに、日本建築を肯定的に評価した邸宅も、日本式建築物の異化的利用の例といえよう。

韓国のコロニアルタウンを大きく特徴づける西洋式建築物は、韓国独立後も継続的に利用され、現在は保存の対象となっている。これらが有する異化効果は強力ではあるが、日本そのものをイメージさせることなく、植民地支配の歴史を物語る「無難な」存在である。

公共空間には西洋式建築、私的空間には日本式建築という枠組みは、コロニアルタウンが形成された当初から存在した。公共空間の日本式建築物が排除された現状では、西洋式建築物のみが公共空間を満たす。現在の韓国で日本建築の保存を議論する際に対象となるのはこの部分のみである。かたや、私的空間の日本式建築物は、商業的に利用価値のあるもの、審美的な観点から優れていると所有者が判断するもののみは残されるが、長屋をはじめとする簡便な建築物は同化的利用の道をたどり、将来的には韓国の都市景観のなかに埋没するであろうと考えられる。

西洋式建築物の異化的保存と、日本式建築物、とくに長屋の同化的利用が、コロニアルタウンにおける日本建築に与えられたおもな評価である。邸宅や一部の店舗に対する異化的利用も日本建築に対する評価ではあるが、これらは前二者の狭間に位置するオプションな選択肢であろう。

コロニアルタウンは日本式・西洋式建築物で元来構成され、ホスト国文化である韓国式建築は、他の植民地都市と同様、隔離されていた。しかし、公共空間における日本式建築物の消去と、私的空間における日本式建築物の同化が進展した結果、韓国のコロニアルタウンには、西洋式・日本式建築物のみならず、韓国式に同化しつつある日本式建築物と、都市化の過程で増加した韓国式建築物が混在し、一種の無国籍的景観を呈するにいたった。この無国籍性こそが、韓国のコロニアルタウンにおける景観の独自性である。

西洋式建築物のみが保存対象となるという事実は、韓国人一般が日本を直接的に想起する建築物を受け入れかねていることを端的に示す。韓国人にとってコロニアルタウンは負の遺産に他ならない。

そこに現存する建築物とともに暮らすことは過去の歴史と共存することである。群山・木浦の人びとは、そのような歴史に直結する公共空間の日本建築は消去し、西洋式建築物を保存し、長屋を同化的に利用することで、歴史を正面からわずかにはずした角度から眺め渡そうとしているといえよう。

最後に、写真資料と現存する建築物の資料性について述べることで、この稿を終えたい。澁澤写真は植民地時代の朝鮮農村を主な被写体とし、さらに朝鮮の「原形」ともいえる景観に焦点を当てていた。それらは「日本」から意図的に目をそらし、植民地支配下の朝鮮という現実を結果的に隠蔽している。写真には撮影者の意図が当然反映されるため、非文字資料として写真を利用する場合には、撮影者の視線を評価するプロセスが不可欠である。一方、現存する建築物は過去の景観を知るための資料であり、同時に現在の景観構成要素でもある。写真は現存する景観の形成プロセスを理解するために有益であり、かたや現存建築物は過去の景観の変遷を解き明かす上で説得力のある資料である。写真と現存する建築物をととも非文字資料としてあつかうことは、単に過去の景観を復元することにとどまらず、現在の景観を評価するためにも有益である。

注

- (1) テクノスケープの活用は、産業遺産の保存において見いだせる。たとえば横浜のみなとみらい21地区再開発における三菱重工ドックや赤煉瓦倉庫はその例である。
- (2) ソウルのチャイナタウンは南山北麓^{ナムサン}にあり、韓国が中華人民共和国を承認するまでは中華民国大使館があった。仁川のチャイナタウンは、港町仁川を象徴する観光スポットとして、横浜や神戸の中華街と同様の地位を得ている。
- (3) 論達山は旧陸軍参謀本部陸地測量部地形図の表記であり、現在の韓国国立地理院地形図では儒達山と表記される。読みはどちらも「ユダルサン」である。
- (4) 東洋拓殖株式会社は、形式上日本と大韓帝国両政府の共同出資で朝鮮での拓殖事業を行うために1908年に設立された。しかしその実態は大韓政府から提供させた田畑1万1,400町歩をもとに、最終的には田3万6,000町歩、畑1万9,000町歩を所有し、小作人7万9,000人から50%を超える高額な小作料を徴収する、植民地経営の実働部隊であった（黒瀬 2003）。
- (5) 帝冠様式は帝国議会議事堂（現、国会議事堂）の設計競技で建築家の下田菊太郎が発表した建築様式が起源とされる。帝冠様式の建築物は鉄筋コンクリートを用いた西洋式建築の上部に瓦屋根を載せることで、和洋折衷のスタイルを有する。このスタイルは、西洋式建築を咀嚼した日本の建築家たちが、国粹的なイデオロギーをまといつつ和風建築に回帰した結果とされる（飯島 1996：40-53）。帝冠様式の建築は九段会館（旧、軍人会館）や東京国立博物館（旧、東京帝室博物館）に見られる。
- (6) 長屋は群山・木浦で一般的に現在でも通用する語である。
- (7) 旧木浦府庁舎前は、植民地時代においてソウル・開城^{ケソン}・平壤を経由して新義州にいたる国道の起点であり、現在でもソウルに通じる国道1号、および釜山にいたる国道2号の起点である。日本は植民地支配の基盤として道路整備に重点を置いたが、韓国は独立後、日本の道路政策をある面では継承している。
- (8) 旧京城府庁舎は1926年に建てられたルネッサンス様式の建築で、2003年に登録文化財に指定された。
- (9) 韓国語の「恨」は必ずしも日本語の「恨み」と同義ではない。恨はあこがれや上昇の対象に到達し得なかったときに生ずる悲しみや無念の情を本来的には含む。したがって、日本に対する恨には、単なる怨恨では理解できない複雑な心情が交錯する（小倉 1998）。
- (10) 赤煉瓦倉庫の存在は仁川においても確認できたが、群山のそれと同様、放置されている。韓国における近代遺産の保全は、日本の植民地支配とも関連するため、複雑で困難な事情が多い。

文 献

チェ ギヨブ

2000 「都市」第29回世界地理学大会組織委員会編『韓国地理』 ソウル：教学社，100-116. (韓国語)

浜田弘明

2004 「「渋沢フィルム」の景観分析とその課題—朝鮮半島多島海を事例として—」本COE年報2：74-93.

浜田弘明・八久保厚志

2004 「写真資料と景観変容—澁澤フィルムの分析に向けて」本COE調査研究資料1：127-160.

市川健夫・山本正三・斎藤 功

1984 『日本のブナ帯文化』東京：朝倉書店.

飯島洋一

1996 『王の身体都市—昭和天皇の時代と建築—』東京：青土社.

キム テヨン

2003 『韓国近代都市住宅』ソウル：キムンダン. (韓国語)

金 中奎

2001 『群山歴史物語—古地図と古写真カラ見タ群山ノ歴史—』群山：ナイン. (韓国語)

黒瀬郁二

2003 『東洋拓殖会社—日本帝国主義とアジア太平洋—』東京：日本経済評論社.

李 圭憲編

1996 『写真デミル近代韓国 上—山河と風物—』ソウル：ソムンダン. (韓国語)

小倉紀蔵

1998 『韓国は一個の哲学である—〈理〉と〈気〉の社会システム—』東京：講談社.

岡田昌彰

2003 『テクノスケープ—同化と異化の景観論—』東京：鹿島出版会.

須山 聡

2004 「風景印にみる地域の展示」本COEニューズレター3：16-18.

内田順文

1989 「軽井沢における〈高級避暑地・別荘地〉イメージの定着について」『地理学評論』62A：495-512.

山本理佳

2005 「佐世保市行政による軍港像の創出—1960年代の米軍原子力艦艇寄港反対運動をめぐって—」『地理学評論』78：634-648.